連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「長尾景虎（上杉謙信）～鉄砲の技術、九州から入手～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2021 年 11 月 19 日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

長尾景虎（上杉謙信）

鉄砲の技術、九州から入手

種子島にポルトガル人を乗せた中国人倭寇王直の船が来航し、領主種子島時堯に鉄砲を伝えた事実は、よく知られます。「鉄炮記」が記すその年代は天文12（1543）年で、近年ではその前年説もあります。

実は、日本への鉄砲伝来は、種子島だけに限られたものではありません。例えば、「大友家文書録」によると、大友義鎮（宗麟）が、天文22（53）年までにポルトガル人から種子島銃とは異なる系統の鉄砲を得ていたようです。その「南蛮鉄砲」の進上を受けた将軍足利義輝は、翌年1月に義鎮に宛てた礼状をしたため、「鉄砲数多ご座候へども、只今のご進上は類なく候」（各方面から多くの鉄砲が贈られてくるが、今回の大友義鎮進上のものは類例がない）と大喜びしています。

一方、大友家による鉄砲の国内生産体制の確立も早かったようです。永禄6（63）年、義鎮は豊後国三重郷（豊後大野市）の甲斐本鍛冶を大名御用鍛冶とし、一般の鍛冶衆が所有する地鉄と炭の全てを「公役」として供出させる集中生産体制を敷いています。永禄初年は、自家製の鉄砲に改良を加えて複数回にわたって足利義輝に進上するほど鉄砲生産に傾倒した時期で、甲斐本鍛冶が集中生産したのは、通常の刀ではなく鉄砲と考えて間違いないでしょう。

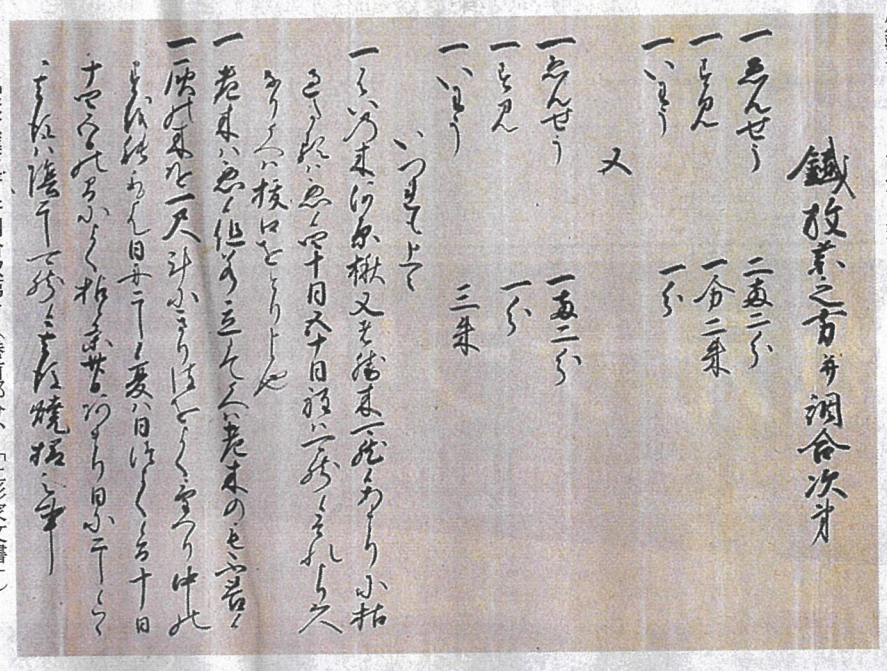
16世紀半ばの伝来から十数年で確立された九州での鉄砲と火薬の集中国産技術は、その後、瞬く間に日本列島各地に伝わります。その技術導入に成功したのが、越後の戦国大名長尾景虎（後の上杉謙信）でした。

大友義鎮と同じ享禄3（30）年生まれの景虎は、30歳の永禄2（59）年6月に上洛して足利義輝に謁見します。その際に将軍から下賜されたのが、巻子仕立ての「鉄放薬之方并調合次第」（鉄砲用火薬の製造・調合の秘伝書）でした。「上杉家文書」によると、これは大友義鎮が将軍に献上したものとあります。

火薬の成分となる「ゑんせう」（塩硝＝硝石）・「すみ」（炭＝木炭）・「いわう」（硫黄）調合の量と方法が詳細に記されています。特に、「硫黄、赤く黄色なるを用い申し候、青色なるは悪しく候、白砂など混じり候はば、それをばよく小刀にてこそげ落とし、調合しかるべく候」と、色味による硫黄の目利き（赤・黄色は精良、青色は不良）や、砂の選別方法の詳述は、硫黄産地九州の伝統に裏付けられた秘伝技術といえます。

長尾景虎は、このようにして海外に開けた九州大名が保持する先進的な軍需機密を入手していたのです。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）



「鉄放薬之方并調合次第」（巻首部分、「上杉家文書」）

＝月1回掲載＝